

みんな同じ

氷上中学校 一年 十倉 和花

もし、目が見えなくなったら。考えたことはありますか。目を閉じれば、簡単にその体験ができると思います。じゃあ、一生目を閉じたまま過ごせと言われたら。

私はそのことを想像して、怖くなりました。今まで当たり前に見えていた家族や友だちの顔、家の中の景色、鏡ごしに映る自分までもが、何も見えなくなる。目を閉じてみるだけでも、不安な気持ちになります。

では、目が見えていない、何も見ることのできない人は、かわいそうなのでしょうか。学校で、目の見えなくなった方の話を聞く機会がありました。その方は生まれつき目が見えなかったのではなく、病気のため、四十六才という人生の途中で失明されました。まさに、急に誰かから「一生目を閉じて過ごせ」と言われたようなものだと思います。その方は、最初はとても辛く、現実を受け入れられずに、奥さんに「毒を盛ってくれ。」と、たのんだこともあったとおっしゃっていました。

ですが、その後、奥さんに進められ、ライトハウスという目に障がいのある方が日常生活ができるようになるための施設に入られ、一人でご飯を食べる、トイレに行く、部屋の中にある物を探すなどのことができるようになったといいます。それに、歩行訓練をする中で、今まで気にもしなかった川の流れる音や鳥の鳴き声が、とても美しく聞こえるようになったといわれました。

この話を聞いて、私は今まで目が見えない人や耳が聞こえない人をかわいそうだと思い、無意識に「目が見えないのにすごいな。」「耳が聞こえないのにできるんだな。」と思っていたことに気が付きました。その方の話を聞いた後、感想を言う時間がありました。そこで出てきた感想のほとんどに、「目が見えないのに」という言葉が入っていました。この時、私は、これはマイクロアグレッションなのではないかと思いました。

マイクロアグレッションとは、その人に悪意はなくても相手がきずつくこと、小さな功撃ということです。例えば、「〇〇君、男の子なのに女子力高いね。」「〇〇ちゃん、勉強苦手なのにすごいね。」など、ほめているつもりでも相手がきずついてしまうこともあるのです。私が思い、みんなもそう言っていた「目が見えないのに」という言葉は、知らず知らずの内に人をきずつけてしまっていたのかもしれない。

私は今まで、障がいのある人の話を聞いたり、実際に出会ったりしたことが何度かあります。その中で、私は無意識に差別をしてしまっていたのではないかと

思います。体の一部が不自由、目が見えない、耳が聞こえないなど、外から見て分かるような障がいがある人にどこか距離を感じ、「〇〇なのに」といって勝手に自分とその人を切り離していたのかもしれませんが。でもそれはまちがっていて、みんな同じ人間で、みんな心があって、誰も差別していいわけがないという事に気付きました。

世の中には、「障がい者だから。」と言って差別をしたり、関わりを持とうとしなかったりする人がたくさんいます。今すぐに差別を無くすことはできませんが、一人一人が思いやりを持って過ごすことができるのなら、それはみんなが幸せになれる第一歩なのではないでしょうか。